

埼玉の夜明け

第 43 巻号
第 1 号
通算 133 号

日本キリスト教団
関東地区埼玉地区
社会委員 会

小さくされた者達との連帯を

川口教会牧師 本間 一秀

埼玉地区社会委員会の御奉仕を
させて頂けることに感謝して
いる。社会委員会の一員とされた
時、詩編一一三編の御言葉が思い
出された。「主は御座を高く置き、
なお、低く下って天と地を御覧に
なる。弱い者を塵の中から起こ
し、乏しい者を芥の中から高く上
げ、自由な人々の列に、民の自由
な人々の列に返してください。」
(詩編一一三・五―八)。

御子、主イエス・キリストはこ
の世に降り、小さくされた者達を
癒し、十字架の贖いの死を遂げら
れて、復活により死に勝利され
た。その大いなる恵みのうちに、
私達は生かされている。しかし、
今の全世界、日本を顧みる時、
「飼いの居ない羊のように弱り
はて、打ちひしがれている」人々
が何と多いことかと思わされる。
ここに、私が体験した「小さく

された者」達の状況を報告すると
共に、私達が為すべき業を探っ
てみたい。

(1)フィリピンでの体験から
今から一〇年前、フィリピンの
ネグロス島を訪問した時の体験か
ら記したい。

1. 戦争責任の重さ

セブからフェリーで約三時間、
ネグロス島州都、ドマゲットイ到
着後、シリマン大学の教授に御案



畑の辺には会堂が、日曜日には満杯に
なる程のこと 熱い信仰心が伝わる

内頂き、郊外の教会を訪問した時
のことである。牧師からの開口一
番は「お前達日本人が何をしにこ
こに来たのだ、この村の民家は
お前達日本人の兵隊が急に入って
来て、全て焼き払われて、何人も
の人々が殺された。私は日本人を
赦すことは出来ません」との言葉
であった。だが、その後婦人会の
心尽くしのウエルカムランチを頂
きながら「和解の時」が与えられ
たことは感謝であった。

同様の経験はその後数回あつ
た。訪問した教会の牧師が兼牧す
る教会を訪問した際、教会の人々
は皆終始表情が硬かった。同様に
周りの村々は焼き払われ、被害を
受けたのである。一人の老婆が
「私の家も焼かれてしまったよ」
と言っていた。

砂糖黍畑の農家にステイした時
のことである。夜現地の方々との
懇談会が持たれた。まだ乳飲み子
であった自分の子が「日本兵によ
り宙に放り上げられて、銃剣で刺
されて殺された」との耳を覆いた
くなるような衝撃的な話を聞かさ
れた。

シリマン大学農学部を農場を訪
問した。プロフェッサーが管理す
る果樹農園で記念の植樹をした。
その果実の売り上げは伝道者の為
に献げられるとのことであった。
そのプロフェッサーに、自ら栽培

したという、とうもろこしや
ジュースをご馳走になった。その
時、自分が小学校の時、自分の見
ている前で両親が日本兵に殺され
たと聞かされた。一家で共に食事
をしている時に、急に日本兵が進
入して来たとのことである。「食
べろ」と笑顔で勧めてくれる教授
の姿に胸が熱くなった。

「戦争の責任」とは難しい。し
かし、日常生活を普通に送ってい
る中に押し込み、何の落ち度もな
い方々に危害を加えた日本の姿。
「罪責告白」が為されてしかるべ
きと思わされた。

2. 貧困との戦い

ネグロス島は砂糖黍栽培がその
中心的な産業である。プログラ
ムの一環で砂糖黍畑の農家にホーム
ステイさせて頂いた。農家の人々
は殆んどの人達が土地を持てず、
所謂大地主の下での「小作人」で
ある。日々数ペソの賃金を得ての



ゴミ捨て場に隣接した
漁師の家にホームステイ



砂糖黍畑の子供達と共に

貧しい生活である。食事をご馳走
になったが、夕朝食はライスの他
にヌードルと薄くスライスされた
「瓜」の一種の野菜のみ、昼は御
主人がやしの木に登りココナツの
実を採って下さった。犬は痩せて
いた。大勢居る子供達と遊んだ
が、その笑顔が嬉しかった。他の
国の生活を知らないのである。子
供達が大勢なのは、畑の大事な労
働力であり、家計の担い手である
からで、初等教育も途中で挫折せ
ざるを得ない家庭が殆んどである
とのことである。搾取されている
のである。

次に漁村の漁師のお宅にもホー
ムステイした。砂糖黍畑の仕事に
挫折した方々が海辺に居を構えて
いた。「違法建築、住居」とのこ
とで常に立ち退き命令が出されて
いるとのこと。電気は違法に引き
込み、水は住居から離れた場所に

ある井戸から運び込んでいた。ご主人は出漁中とのことで、奥様と子供達で浜に出て、貝や蟹等を採った。それが晩の「おかず」であった。翌朝ご主人が漁から帰宅した。日本の商社が「伊勢海老」の養殖で浜辺に大きな池を作ってしまった、漁場が荒らされてしまっている。その為相当沖に出なければ漁が出来ない状況である。今日の漁の売り上げ分は燃料費で消えてしまったとのこと。付近には町のゴミ捨て場があり、常に異臭が漂う中でホームステイであった。

砂糖黍畑の人々、海辺のゴミ捨て場に住む漁師の方々、共に大資本の陰に押しつぶされそうになりながらも、必死に生きて居られる。その姿に感銘した。私達の苦勞、貧しさ等比較にならない。マニラ郊外のゴミ捨て場では、「スカベンジャー」と呼ばれるゴミの中から換金可能な物を拾い集めて生活をされている方々が数万人居ると言う。ドマゲッテイ、セブのダウンタウンではストリートチルドレンが溢れていた。プロゲラム最後の日、ドマゲッテイの船

着場では「ワンコイン!」「コインを海に投げろ」とアピールされた。とてもそんなことは出来なかった。(2)沖繩の苦しみ
昨年私達は八・一五集会に、沖繩教区の平良修牧師をお招きし講演して頂いた。講演の内容(昨年地区通信掲載記事から引用)からここにその内容を記したい。
1. 沖繩という鏡を通して見える日本という国家
沖繩県民の中には「日本人ではない」と言う意識を持った人が概

主張

泊原子炉の停止によって、日本の原発は四二年ぶりに全停止となった。以来、福井県大飯原発の再稼働問題が大きくクローズアップした。三・一一による福島原発事故もあり、国民の脱原発への方向性は調査結果をみても明らかにってきた。

関西電力は大飯原発を稼働させなければ、今年夏の最大電力不足は一五%と発表。原発再稼働に反対の声が沸き上がった。又、この地域の消費者の節電取り組みへの調査では「ある程度取り組み。大いに取り組む」と答えた人は八九%。取り組みないと答えた人は一〇%と原発の危険性より安全性を重視している人が圧倒的多数だった。このことからしても今後の日本のエネルギー政策は脱原発への絶好の機会に思えた。

ところが野田首相は国民の生活を守る為として無理矢理原発再稼働を決定した。しかも夏場だけでなく継続的にだ。節電したり、電力会社同士で融通仕合えば、夏の電力不足は乗り切れるだろうというのに、又福島原発事故の原因等、何等決着

してないまま、危険性を残したまま再稼働しようとするのは何故なのか全く不可思議でならない。表向きには原子力発電はコストが安いからとしているが、それよりも以下のようなことが主な原因のように思えてならない。
先ず、「原子力むら」の存在からなる利権で、原子力発電所が稼働することによって地元は勿論、企業、政治家等へ多額の金銭が流れている。地元で原発を唱えようと、村八分にされることはよく言われることだ。
そして政治家の選挙票と支援資金だ。電力会社は政治献金として多額のお金を政党や政治家に送っている。これまで特に政権をもっていた自民党には多額の献金がなされている。これでは電力会社に何も言えないのは明白だ。事実、三・一一事故について何等反省の弁は行っていない。
首相は再稼働を決めた。このままでは原発推進派の思う壺だ。幸い反原発の声は大きくなりそうな気配だ。脱原発への道は危険なこととは反対と、声を大にして主張していくことが大切で、継続して取り組んでいかなければ道は開けないだろう。

ね四割ある。これが沖繩県民の自意識である。沖繩には琉球王国としての歴史がある。独自の文化、民族性を作りあげて来た。それを戦争も基地も破壊することは出来ない。歴史的な背景の中で、日本の沖繩に対する構造的な差別を感じる。一八七九年明治政府による武力行使により「琉球王国」は日本に同化させられた(琉球処分)。一九四五年沖繩地上戦は本土防衛の為の捨石となった(第二次琉球処分)と言える。一九五二年日本は米国から独立を回復したが、沖繩は占領下に置かれた。日本の都合で沖繩は切り捨てられた。(第三次琉球処分)。一九七二年沖繩は返還された。平和憲法への復帰を夢見たが、日米安全保障条約(実質的に軍事同盟)体制下に米軍基地が置かれるようになった。辺戸岬の碑には「平和への願いは叶えられず」とある。ベトナム、アフガン、イラク戦争「人殺し」のお手伝いをして来た。そして今、普天間基地の辺野古への「県内移転問題」があるが、本土の各都道府県は非協力的である。日本国民による沖繩差別は続いているが、沖繩は独立の道も追求している。

2. 沖繩教区から見える日本基督教団

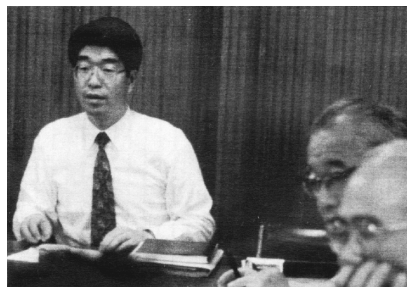
敗戦後一九四六年開かれた第三

回教団総会では「沖繩支教区」の名は消えていた。教団は沖繩の存在を尊重していたのか疑問である。一九六九年教団は「戦責告白」をし、合同を実現した。しかし、沖繩の教会、人々の痛み、苦しみを無理解の裡に為された「合同」であった。その後「合同のとなえ直しと実質化」について、教団総会に数回提案をした。しかし、充分な審議がされない裡に、二〇〇二年一〇月の総会で「審議未了廃案」とされてしまった。そして沖繩教区では以来「教団とは距離を置く」との抗議姿勢を貫いているが、これに対し教団は「沖繩宣教連帯金」の減額を決議するに至っている。教団は日本国と同じ体質を持っていると思えてならない。教団は重層的な「罪責告白」が必要である。関東教区の「罪責告白」に期待している。

「沖繩」をまだまだ理解しなければならぬと痛感した。余りにも私達は「沖繩」について無理解であったと反省させられた。フィリピン(アジア)、沖繩と「小さくされた」方々にこれから私達は何を為すべきか?まず「罪責告白」があつて然るべきである。それには様々な角度からの対話と交流を深めていくことである。差別されたもの、小さくされた者に仕えて行かなければならない。

江口進八兄(元埼玉地区 社会委員長)を偲んで

和戸教会員 後藤 龍男



江口進八兄(大宮教会員)が去る四月六日急な病で天に召され、大宮教会で葬儀が行われました。同兄は大宮教会の長老としてその重責を担いつつ埼玉地区にあっては地区社会委員長として一九九一年～一九九五年の五年間にわたってその任を担って下さいました。また委員としても長年にわたって私たちと一緒に活動され、委員を退いた後も社会問題にはいつも関心を持たれ、社会委員会の主催する集会には積極的に参加されるなど協力を惜しまない方でした。江口さんが委員長の時私は委員として働きを共にいたしました。一九九〇年(一九九〇年～二〇〇〇年、第六七号～第六九号)を見てみる

と江口さんが委員長在任中に書かれている「社会活動方針」(委員長が出すことになっている。)を読んで見ると江口さんの性格を偲ばせる表現が「社会活動方針」の中に見いだされます。例えば一九九二年度の「社会活動方針」には活動の具体的な指針として、「地区社会委員会の存在目的を思想しつつ、活動のあり方を模索する年度にしたい。」「どのようにして委員会として思想したこと、模索したことを各教会に伝えるべきか。」と記されております。この方針が書かれた背景には委員長である江口さんの主導のもと、社会委員会の働きについて委員が納得いくまで徹底的に話し合う時間を持ったことでした。江口さんは当時、勤務されていた自動車メーカーHONDAのバリバリのビジネススマンであり、民間会社の社員研修の場などでよく用いられていた「KJ法」(文化人類学者川喜多二郎氏の開発した課題解決のための手法)のようなものを用いて、埼玉地区における「社会委員会」の課題は何か、問題点は何か等を洗い出すことにより地区内の諸教会に対して社会委員会はどんな働きをしていくべきか等について取り組んだことを思い出しました。委員会の働きをしていくため

に目標をきちんと持つべきであり、曖昧さや、安易な妥協を善しとしない江口さんの几帳面な性格を表しているように思いました。信徒委員長としての自由な発想のもとリーダーとして持てる力を社会委員会のために発揮して下さいました。

江口さんとは大宮教会での集會があった時などに、現役をリタイヤされたのだから再度社会委員として働いてもらえないかと何度かお願いしたことがあります。お願ひしたことがありません。今となってはそれもかないません。人を包み込むようなあの笑顔や振る舞いに二度とふれる事も出来なくなり寂しい限りです。享年六五歳でした。

書評

『関東大震災時の 朝鮮人虐殺とその後』

虐殺の国家責任と民衆責任

山田昭次・著

(創史社・刊、二二〇〇円+税)

本庄教会牧師 飯野 敏明

「関東大震災」は、今から八九年前、一九二三年九月一日に起こったマグニチュード七・九の大震災で、死者・行方不明者は、約

一四万人の大災害であった。

そして、この日から、東京から始まり、関東周辺で、軍隊と日本の民衆たちによる、無数の「朝鮮人への虐殺事件」が起こり、その犠牲者は合計六千人を超えたと言われている。

埼玉県でも、内務部長が、県下に「不逞朝鮮人暴動に関する件」という通達を出している。

「朝鮮人が、放火している」「井戸に毒を入れた」などの流言(デマ情報)が広まる中、各町村に組織された「自警団」が、竹やり・こん棒・日本刀で武装し、東京内外から避難してきた朝鮮人達を、多数虐殺した。

本書に導かれて、私たちは、まず近代日本と朝鮮との悲しい歴史に学ばねばならない。この震災から一三年前、日本は朝鮮を植民地とした。朝鮮民衆の日本への抵抗は激しく、一九一九年の「三・一独立運動」に象徴されるように、朝鮮民衆の抵抗と、それを抑圧する日本の官憲・軍隊とは、まさに「戦争状態」の中にあった。

震災後、日本政府は、ただちに、「戒厳令」を發布し、軍隊が出動した。ある研究者は、この「戒厳令」が朝鮮人大虐殺の大きな契機となったと指摘する。

以上、虐殺事件に至る歴史的概

略を記したが、本書の特徴、それは、「朝鮮人虐殺」をめぐる、日本の国家としての責任と同時に、この虐殺に加担した日本の民衆たちが負うべき「民衆責任」についてである。

たとえば、私が住む本庄市には、市内に「朝鮮人犠牲者慰霊碑」が戦後建立された。同様な追悼碑・慰霊碑は関東各地に建立されている。

ただ、少数の例外を除いて、これらの碑に刻まれた碑文の文章には、虐殺と虐殺に至った、具体的史実や虐殺の実行者等は、一切記されていない。

本書の著者は、「結局、これらの碑文は、朝鮮人を虐殺した日本人民衆の責任を隠すことによって、民衆を朝鮮人虐殺の加担者にした日本国家のより大きな責任追及への道を開くことができなかった。」と指摘する。

日弁連は、二〇〇三年、当時の小泉首相宛てに、震災時の朝鮮人・中国人虐殺に関する国家責任を認め、被害者と遺族に対する謝罪と、事件の調査・その原因究明を求めて「勧告書」を提出したが、時の政府から一切の応答は得られなかった。

事件から八九年後の今も、虐殺事件の国家責任を追及し、朝鮮人

犠牲者の名誉回復を求める日本での運動は、内外の朝鮮人たち・日本人たちに継続されている。

最後に私が記したいこと、それはあの虐殺時に、「朝鮮人を殺すな」と訴え、その命を守ったごく少数の日本人がいたことである。本書の著者はそれらの日本人たちが、当時の朝鮮人たちと、主義主張を超え、人間的に交流できた人々であった旨を記している。

二〇一二年度 社会委員会活動方針

社会委員長 本間 一秀

私達社会委員会に託された使命、それは、この地球を神の国と為す為に、宣教の一翼を埼玉地区において担うことと信じて止まない。それには何を為すべきかである。

本年度は昨年休会した社会活動委員会を再開する。社会委員会と各個教会との良きパイプ役となつて頂きたいと願っている。

今年度の「環境問題」に関するプログラムは、七月一六日(月祝日)に行なわれる、教区宣教総合協議会を共催することにした。アジア学院からの講師と、若松栄町

教会の片岡輝美さんの講演から学ぶ。「美しい大地は私達の神が与えられた恵、貴い贈り物」である。原発問題で揺れる私達の社会。昨年に引続き「私達の大地は神の恵み、貴い贈り物」としての認識をさらに強く呼びかけて行きたい。

又、沖縄との合同の捉え直しの問題は関東教区としても積年の課題である。「罪責告白」も早急に実施したいものである。本年度は八・一五集会に沖縄教区から金城重明牧師をお迎えし、講演をお願いする。「集団自決」という悲しい講師自らの体験から講演して頂く。基地のない平和な沖縄を願うと同時に「合同の捉え直しと実質化」に向けての礎となればと願っている。

私達社会委員会の働きが、この埼玉地区にあつて主の御栄を表すものとなるよう希望して止まない。

平和を求める八・一五集会

日時・八月一五日(水)

午前一〇時～一二時

会場・大宮教会

講師・金城重明牧師(沖縄教区)

演題・「強制集団死から

キリストに生かされ」

社会委員会報告

◎第一回社会委員会

日時・四月三〇日(休)

一〇時～一二時

場所・川口教会(出席者八名)

●委員

教職 本間 一秀(川口)

飯野 敏明(本庄)

清水与志雄(行田)

岡村 紀子(北鴻巣)

浅子 和夫(和戸)

井上 雅男(浦和東)

岩井田慎二(埼玉和光)

後藤 龍男(和戸)

●組織

委員長・本間 一秀

書記・後藤 龍男

委員・岩井田慎二

井上 雅男

岡村 紀子

清水与志雄

協力委員・浅子 和夫

●小委員会

①平和と天皇制

○清水、岡村、本間

②部落差別と人権問題

○後藤、本間、岩井田

◎環境問題

○井上、本間、岡村

④「埼玉の夜明け」編集

○浅子、飯野、本間

*各教会、伝道所から社会活動委員として派遣された方々(敬称略)

相島 邦之(大宮)

高本 由美(埼玉大通り)

西田 立郎(加須)

長川 雅昭(所沢みくに)

堀越 徹也(本庄)

安永 直美(埼玉和光)

渡辺 久純(桶川)

以上七名(六月一七日現在)

◎第一回社会活動委員会引き続き第二回社会委員会

日時・六月一七日(日) 一五時～

場所・川口教会

●社会活動委員会(出席者九名)

内容

一、礼拝・本間牧師

二、講義・

「罪責告白問題について」

講師・最上光宏牧師

(所沢みくに教会牧師)

質疑応答

●社会委員会(出席者八名)

一、環境問題講演会の対応についての話し合い

環境問題講演会・

七月一六日(月・休) 一〇時～

場所・大宮教会

●奉仕担当者、負担金等を決める

二、八・一五集会の準備

日時・八月一五日(水) 一〇時～

場所・大宮教会

礼拝・飯野敏明牧師

講師・金城重明牧師

●当日までの仕事内容確認と分担等の話し合い

三、小委員会、その他の報告

●部落解放基礎講座の案内

●「埼玉の夜明け」編集

四、その他

編集後記

昨年の八・一五集会では沖縄教区の平良修牧師から「沖縄・沖縄教区から見える日本国・日本基督教団」と題して講演していただきました。今年の集会では更に金城重明牧師から「沖縄戦」を掘り下げて語っていただくことになっています。ご高齢でもありますので貴重な機会です。是非お話を聞きましょう。(浅子)